

四菩薩造立抄

弘安二年五月一七日 五八歳

白こ袖そで一・薄うす墨ずみの染め衣一・同色の袈裟け一帖さいちじょう・鷲目が一貫文給もくび候。今に始めざる御志、言ことばを以て宣のべがたし。何れの日を期してか対面を遂げ、心中の朦朧もうろうを申し披ひらかんや。

一、御状くじょうに云はく、本門久成きょうじの教主釈尊を造り奉り、脇士きょうじには久成地涌の四菩薩を造立ぞうりゅうし奉るべしと兼ねて聴聞仕り候ひき。然れば聴聞の如くんば何れの時かと云云。

夫それ仏、世を去らせ給ひて二千余年に成りぬ。其の間月氏・漢土・日本国・一閻浮提の内に仏法の流布する事、僧とうまは稲麻のごとく法ちくいは竹葦の如し。然るにいまだ本門の教主釈尊並びに本化の菩薩を造り奉りたる寺は一処も無し。三朝の間に未だ聞かず。日本国に数万の寺々を建立せし人々も、本門の教主・脇士を造るべき事を知らず。上宮太子は仏法最初の寺と号して四天王寺を造立せしかども、阿弥陀仏を本尊として脇士には観音等の四天王を造り副そへたり。伝教大師延暦寺を立て給ふに、中堂には東方の鷲王の相貌がを造りて本尊として、久成の教主・脇士をば建立し給はず。南京七大寺の中にも此の事を未だ聞かず。田舎の寺々しか以て爾なり。

かたがた不審なりし間、法華經の文を拝見し奉りしかば其の旨むね顕然なり。末法闘とうじょう堅固けんこの時にいたらずんば造るべからざる旨ふんみょう分明なり。正像に出世せし論師人師の造らざりしは、仏いましの禁いめを重むねんずる故なり。若し正法・像法の中に久成の教主釈尊並びに脇士を造るならば、夜中に日輪出で日中に月輪の出でたるが如くなるべし。末法に入いって始めの五百年に、上行菩薩の出でさせ給ひて造り給ふべき故に、正法・像法の四依の論師人師は言にも出ださせ給はず。竜樹・天親こそ知らせ給ひたりしかども、口より外へ出ださせ給はず。天台智者大師も知らせ給ひたりしかども、迹化しゃけの菩薩の一分なれば一端は仰せ出ださせ給ひたりしかども、其の実義をば宣のべ出ださせ給はず。但ねざめの枕ほととぎすに時ひとこえ鳥の一音を聞きしが如くにして、夢のさめて止やみぬるやうに弘いめ給ひ候ひぬ。夫より己外の人師はまして一言をも仰せ出だし給ふ事なし。此等の論師人師は靈山にして、迹化の衆は末法に入らざらん、正像二千年の論師人師は本門久成の教主釈尊並びに久成の脇土地涌上行等の四菩薩を影ほども申し出だすべからずと御禁いめありし故ぞかし。

今末法に入ぬれば尤もも仏の金言の如きんば、造るべき時なれば本仏本脇士造り奉るべき時なり。当時は其の時に相当たれば、地涌の菩薩やがて出でさせ給はんずらん。先づ其の程に四菩薩を建立し奉るべし。尤も今は然るべき時なりと云云。されば天台大師は「後五百歳遠く妙道に沾つるおはん」としたひ、伝教大師は「正像稍過ぎ已幕はって末法太やだ近きに有り。法華一乗の機お、今正まさしく是其の時なり」と恋ひさせ給ふ。日蓮は世間には日本第一の貧しき者なれども、仏法を以て論ずれば一閻浮提第一の富める者こなり。是時の然らしむる故なりと思へば喜び身にあまり、感涙押さへ難く、教主釈尊の御恩報じ

奉り難し。恐らくは付法蔵の人々も日蓮には果報は劣らせ給ひたり。天台智者大師・伝教大師等も及び給ふべからず。最も四菩薩を建立すべき時なり云云。

問うて云はく、四菩薩を造立すべき証文之有りや。答へて云はく、涌出品に云はく「四導師有り。一をば上行と名づけ、二をば無辺行と名づけ、三をば浄行と名づけ、四をば安立行と名づく」等云云。問うて云はく、後五百歳に限るといへる経文之有りや。答へて云はく、薬王品に云はく「我が滅度の後、後五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」等云云。

一、御状に云はく、太田方の人々、一向に迹門に得道あるべからずと申され候由、其の聞こえ候と。

是は以ての外の^{あやま}謬りなり。御^{こころ}得意候へ。本迹二門の浅深・勝劣・与奪・傍正は時と機とに依るべし。一代聖教を弘むべき時に三つあり。機もて^{しか}爾なり。仏滅後正法の始めの五百年は一向小乗、後の五百年は権大乘、像法一千年は法華経の迹門等なり。末法の始めには一向に本門なり。一向に本門の時なればとて迹門を捨つべきにあらず。法華経一部に於て前の十四品を捨つべき^{これ}経文之無し。本迹の所判は一代聖教を三重に配当する時、爾前迹門は正法像法、末法は本門の弘まらせ給ふべき時なり。今の時は正には本門、傍には迹門なり。迹門無得道と云ひて、迹門を捨て、一向本門に心を入れさせ給ふ人々は、いまだ日蓮が本意の法門を習はせ給はざるにこそ、以ての外の^{びやっけん}僻見なり。

私ならざる法門を僻案せん人は、^{ひとえ}偏に天魔波旬の^{はじゅん}其の身に入り替はりて、人をして自身とも^{むけん}に無間大城に墜つべきにて候。つたなしつたなし。此の法門は^{としごろ}年来貴辺に申し含めたる様に人々にも披露あるべき者なり。総じて日蓮が弟子と云って法華経を修行せん人々は日蓮が如くにし候へ。さだにも候はゞ、釈迦・多宝・十方の分身・十羅刹も御守り候べし。其れさへ尚人々の御心中は量りがたし。

一、日行房死去の事^{ふ、びん}不便に候。是にて法華経の文読み進らせて南無妙法蓮華経と唱へ進らせ、願はくは日行を釈迦・多宝・十方の諸仏、靈山へ迎へ取らせ給へと申し上げ候ひぬ。

身の所^快勞^然いまだきらきらしからず候間省略せしめ候。又々申すべく候。恐々謹言。

弘安二年五月十七日

日蓮花押

富木殿御返事